

# 第五福竜丸展示館からの報告—ビキニ水爆被災50周年にとりくんで

安田 和也

## はじめに

2004年3月1日は、ビキニ環礁でアメリカがおこなった水爆実験により静岡県焼津の遠洋マグロ漁船・第五福竜丸が被災をして50年であった。東京・江東区夢の島公園にある都立第五福竜丸展示館では、50周年を記念するさまざまなイベントがおこなわれた。これは展示館を管理運営する財団法人第五福竜丸平和協会が企画・開催したもので、ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50周年記念プロジェクトと銘打っての記念事業であった。<sup>(1)</sup>

ビキニ被災50年は、多くのメディアでも取り上げられ、新聞、テレビなどでもいくつかの特集が生まれ、展示館での企画展のたびに報道された。また、マーシャル諸島の核被害、事件をめぐる日米関係、福竜丸以外の被害として、高知などの被災船や沖縄、韓国の核実験被害など、ビキニ水爆被災に関連したさまざまな問題・課題にたいする調査や研究もすすめられ、学会や研究会での発表、出版などもおこなわれて、改めてビキニ事件を伝え考える多彩なとりくみの1年となった。<sup>(2)</sup>

ここでは第五福竜丸平和協会が展開した50周年記念事業を中心に報告したい。とりくみにあたり多方面から実にたくさんの方々のお力添えをいただいた。その一つ一つはとても紹介しきれないが、この場をお借りして感謝申し上げたい。

## ビキニ事件とはなんであったか

ビキニ事件、第五福竜丸の被災について概括しておきたい。第五福竜丸は、1947年3月、和歌山県の古座造船所においてカツオ漁船として建造され、後にマグロ船に改造されて船名を「第五福竜丸」と改め、赤道海域に繰り出して遠洋漁業に従事していた。

1954年3月1日、第五福竜丸は太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカがおこなった水爆実験に遭遇、「死の灰」をあびて被災した。「ブラボー」と名づけられたこの水爆は15メガトン、広島原爆の1千倍の

威力をもち、破壊の極致を示すものといえた。この被害は、米ソの核兵器開発競争の激化の始まりの時期におこった。23人の若い乗組員は急性放射線障害にかけられ、帰港後、日本中をまきこんでの事件に発展し、「マグロ騒動」「放射能雨」など国民全体に影響を及ぼした。

第五福竜丸ばかりでなく太平洋沿岸の漁港から出港していた漁船からも汚染魚が水揚げされたわけだが、乗組員の放射線被曝については記録されることなく、健康被害の全容はこんにちまで明らかではない。<sup>(3)</sup>

実験をおこなったマーシャル諸島のロンゲラップ、ウトリック、アイルックなどの環礁の人びとにも「死の灰」が降りそそぎ苦難の歴史に曝されることになった。ブラボー水爆をはじめ67回におよぶ核実験被害については、その後、米国の報告書などが公表されマーシャル全域への汚染の広がりなどが明らかにされつつあるが、人びとの困難は今に続いている。<sup>(4)</sup>

第五福竜丸の被災は、原水爆の脅威を人類規模で認識させた事件であった。放射能により地球環境全体に影響が及び、万一、核兵器が戦争で大量に使用されれば人類の絶滅さえもたらすという危険を、人びとの前に提示し警鐘を鳴らした。

広島・長崎の被爆体験をもつ日本国民の間から、原水爆禁止の世論がまきおこり、それは世界に伝播して、国際的な実験禁止、核兵器反対の世論と運動への契機となった。

バートランド・ラッセルやアルバート・アインシュタインをはじめ著名な科学者、知識人も声をあげた。<sup>(5)</sup>

## 第五福竜丸の現在

被災した第五福竜丸にたいして、アメリカ政府は、「放射能を除去して沈めるように」との圧力をかけていた記録がある。米ソの激しい対立が事件の処理にも反映していた。<sup>(6)</sup>

その後、船は文部省により買い上げられ、東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」へと改造されて約10年間使われた。廃船処分となった福竜丸は、解体業者に払

い下げられエンジンなどは取り外されて売却され、船体は夢の島の海面に放置されたのだった。

このことをNHKなどが報じ、忘れ去られていた第五福竜丸への記憶がよみがえってきた。「船を保存しよう」という地元江東区の人びと、市民や原水爆禁止の運動家などが動きだし、やがて組織的な保存運動へと発展する。最終的に夢の島の公園化とあわせて公園内施設として都立第五福竜丸展示館が建設され、船はその中に納められた。1976年6月の開館にあたり、船の保存に携わってきた財団法人第五福竜丸平和協会が都から展示館の管理運営を受託し、今日に至っている。

ビキニ事件から50年とは、事件を直接知らない世代が国民の7割にも達しようという歳月である。しかし、展示館には年間10万人余の市民が訪れ、とくに小中学生・高校生の来館は4万人におよぶ。その親も事件以後の世代が大半である。見学する児童生徒にとり、福竜丸の被災は「遠い昔話」なのだろうか。

50周年プロジェクトの呼びかけは、「第五福竜丸は航海中です」と強調している。この言葉には、核問題が今日なお目の離せない課題であり、戦争も核兵器もない世界を希求する人びとの努力にもかかわらず、いまだに人類はこの脅威から解放されていないことを捉えてほしいとのメッセージが込められている。

第五福竜丸の被害を知り伝えることは、現代の核と戦争と平和を考えることにつながっている。もちろん船が造られ活躍した戦後の歴史や漁業についても学ぶことができる。来館する児童生徒や市民にお話をする職員もボランティアガイドのメンバーも、第五福竜丸を「知らない世代に伝えたい」、事件を知る世代には「記憶をよみがえらせたい」とねがい語りかける。この言葉は、50周年のプロジェクトのキーワードともなった。

### 常設展示のリニューアルと記念出版

記念事業の柱の一つは、日常的に来館者を迎える展示館の常設展示の刷新であった。事件を知らない世代にも興味と関心をもてるように、平易に、明るくビジュアルに…を基本に、展示を大きくし、カラー化した。

展示のパートは次のように構成した。第五福竜丸の被災（水爆ブラボー実験、久保山さんの死、原爆マグロ、放射能雨、原水爆に反対する声）、太平洋の汚染（たくさんの被災船、俊鶴丸の調査、科学者・医学者のとりくみ、事件の政治決着）、マーシャル諸島の核被害、世界の核実験被害、広島・長崎原爆被爆、核兵器開発・核実験年表、ラッセル・アインシュタイン宣

言、漁船第五福竜丸コーナー・マグロの話、夢の島に沈みかかった福竜丸、「沈めてよいか第五福竜丸」投書と船の歴史年表・保存のあゆみ。読む証言コーナーも設置した。

常設展示の作業と並行して『写真でたどる第五福竜丸』を出版した。これは、A4判カラー、104頁で、展示館として初めての図録でもあり、福竜丸をめぐる時代背景と事件の経緯をたどり、船体や所蔵資料を写真で紹介し、今日の展示館の模様を伝えている。また専門家による論考「第五福竜丸事件の現在—日本経済への影響」「水爆実験と日本の科学者」「マーシャル諸島の核被害」や廃船から展示館の開館までの経過や年表などを収録した。本書は日本図書館協会と学校図書館協議会の選定図書となり、展示館での頒布と合わせて、出版社「平和のアトリエ」から発売され書店での販売や公共図書館への普及をすすめることができた。

### 多彩な特別展を企画

常設展示のリニューアル・オープンと特別展のスタートを記念し、2004年2月14日に記念セレモニーを展示館で催した。(写真1、2)

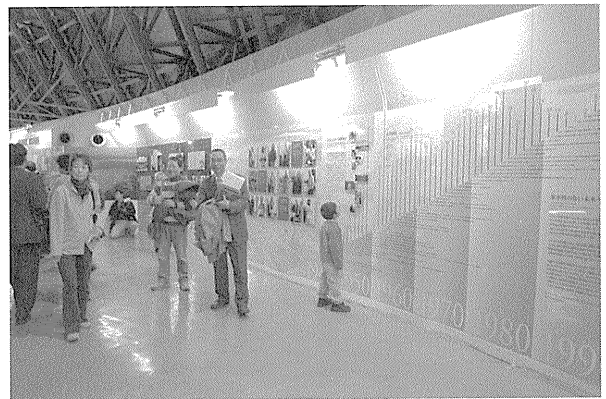


写真1



写真2

真冬の寒さが懸念されたが幸い春のような暖かな陽気に恵まれ100名が参加、平和協会から川崎昭一郎会長の謝辞、東京都を代表して東部公園事務所の松田信毅副所長、マーシャル諸島共和国アマットライン・カブア大使、熱帯植物館の飯沼武近館長、後援新聞三社（朝日・毎日・読売）から毎日新聞社の高尾義彦紙面審査委員長、「死の灰」と命名した元読売新聞記者の村尾清一さん、東京地婦連田中里子参与、東京都生協連の海老沢恵子理事、岡本太郎記念館の岡本敏子館長などから温かい激励をいただいた。広島・長崎・焼津市長と吉永小百合さんの心のこもったメッセージが紹介された。

このリニューアルと合わせておこなわれた特別展は、福竜丸乗組員が当時使用していた日用品、作業服など劣化がすすみ展示を控えていた資料を公開した。

つづいての特別展は、4月3日より11日まで「岡本太郎『明日の神話』の第五福竜丸展」と題して、岡本太郎がビキニ水爆事件に触発されて描いた「明日の神話」の原画（幅2メートル高さ60センチ・油彩）を甲板上に展示した。この作品の画面右下にはマグロを曳く福竜丸が描かれている。

オープニングには、岡本敏子さんが「太郎と明日の神話」と題して講演された。1968年にメキシコのオーナーから巨大壁画を依頼され、帰国した翌日に描いたのがこの原画、「真ん中にガイコツが燃え上がってるでしょ。原爆のキノコ雲がニョキニョキ…原爆の炸裂はすごいけども、岡本太郎のガイコツはばらばらになりながら美しく燃え上がってる。原爆は凶悪なエネルギーだけれど、人間はもっと大きな力で原爆に立ち向かうんだよ。その瞬間に明日の神話が生まれるんだ、ということなのね」と両の手をひろげて情熱的に語られた。(写真3)



写真3

## ロンゲラップの人びとに思いを寄せて

つづいての特別展は、5月15日から6月27日、島田興生写真展「曝された楽園、いのち、子どもの未来」であった。島田さんは、マーシャルに30年間通い続け、途中6年間住みついてビキニとロンゲラップ島などを取材してこられた。その間、島の人びとの被害、苦悩を写真とルポルタージュで伝え、アメリカの核実験を告発しつづけた。

今回の展示では、ロンゲラップの人びと、被害者に焦点をあてて構成した。すでに亡くなった方、今も訴えつづける姿、そのまなざしに迫る45点の写真であった。<sup>(9)</sup>

島田さんは、オープニングの記念トークで次のように語った。「陸にあがっていても第五福竜丸はその後ずっとマーシャル諸島と日本を結ぶ航海をしていたんだと思います。（船は）太平洋の島々の人とか現在の核拡散に思いをめぐらす大事なゲート（入口）の役割を担っているだろうと思います」。

オープニングには、島田さんと懇意な小宮茂雄さんも来てくださった。じつに70年前、後にロンゲラップの村長としてブラボー水爆に直面することになったジョン・アンジャインさんと一緒に日本占領下のマーシャルで働いていた方である。ジョンさんは、50周年の3・1ビキニデーに病軀を押し来日されたが、この写真展が終わった後の7月20日に亡くなった。

## 福竜丸で現代アート

盛夏の特別展は、現代アートであった。アメリカのインディペンデント・キュレーターのアーロン・カーナーさん（サンフランシスコ州立大学助教授・映像学）の企画構成によるコンテンポラリーアート展である。

標題の「コラプシングヒストリーズ（崩れゆく歴史）— 一時・空間・記憶」の意味するところは、戦争、破壊、虐殺さえ、現代社会では起こった瞬間に情報が伝わりと同時にそれは瞬時に色あせたものになる危険を孕む。アートはそれとどう向き合い作品化できるのか。戦争体験の直接ないアーティストたちが、それぞれの家族や祖父母の戦争体験をモチーフに、あるいは歴史を織りなす一人の人間として立ち向かう。ナチによるユダヤ人拘束からの逃亡、強制収容所、被爆、核実験、死の灰、放射線、ベトナム戦争など言葉として並べると直裁的だが、いずれの作品もすぐにそれとは判らない、ひねりのきいたものであった。アメリカから14人の作家と日本の2人のアーティストが参加・出品し、

6人が来日した。(写真4)



写真4

企画者のカーナーさんと初めて会ったのは、2001年の秋だった。彼は、「博士論文で水爆実験で覚醒したゴジラについて触れようと思っていた。奇遇だったのは日本人である妻の父に、私は被災した漁船に興味を持っていると話したところ、それは福竜丸のことはないか、家の近くにその船が残っている…」それが出会いとなった。アート展の構想の発端について、「歴史上の惨劇を、アートを通じて表現してみるのはどうだろうか…一人ひとり違う歴史を持っており、その歴史がつながっていくという面に可能性を感じている」と述べている。

カーナーさんのコンセプトは展示場所にも大きな意味を持たせていた。ビキニ水爆実験により「死の灰」をあげて50年目の木造船と江戸時代末期に建てられ、関東大震災や東京大空襲の劫火をくぐった浅草にある土蔵をリニューアルしたギャラリー「エフ」の2ヶ所で開くことだった。

日本の作家、中ハシクシゲさんとヤノベケンジさんは、核にコミットした作品を創りあげた。中ハシさんはそのために3月1日にマーシャル諸島エニウエトク環礁の核実験のクレーターに出かけた。ヤノベ作品「森の映画館」は、実は子どものための核シェルターであり、その中では可笑しくも怖い核の映像作品が上映されていた。カーナーさんも映画ゴジラ第一作をモチーフにした「死の灰」という映像作品を、船底の下においたモニターにより映し出した。

第五福竜丸で現代アート？しかし、この船が現代へのメッセージを発信しつづけていることを考えるとき、現代アートと福竜丸は妙にマッチして感じられた。期間中には、展示館に余りなじみのないアートファン、美術関係者などを迎えることができた。

その感想の一部を紹介したい。

「世界共通語ともいえる“アート”を通じて忘れてはならない記憶を鮮明に思い出させ、新たな切り口を教えてくれる活動を心から支援します」(20代女性)。

「アートと音楽が手をつなげば、今の若い人も、こんなヘンピな場所でも興味を持って訪れると思う」(20代男性)。

「この展覧会を知らなかったら、私は一生第五福竜丸や水爆実験の事を知らないでいたと思います」(20代女性)。

「東京在住の美術評論家です。ヤノベと中ハシは私の大好きな作家です。彼らの作品と第五福竜丸の関係はとても感動的です」(40代男性)。

「船体のダイナミックさから比べれば作品が少々心細く見えました。しかし、これは現実と理想のギャップとどこか相似ているようにも思えます」(60代男性)。

「価値は高いが福竜丸に関する考察が深まるかは別である。真実を伝えようとする意志だけでは伝わらない現実があり、その点アートのはたす役割はあると思うが、今回の作品がそれに応じていたかどうか」(50代男性)。

「私は美術館やギャラリーという空間ではなく、その場所のもつ意味を踏まえ、さらにアートを重ねるということに興味を持っています。そういう意味で今回の展示は大変興味あるものでした。特にヤノベさんの作品は森美術館とは違ったイミをまた感じとった思いです」(30代女性)。

アート展は、7月16日から8月15日を会期に開催された。

#### 50年前の日本人の心に触れる

第五福竜丸の無線長で被災から半年後に亡くなった久保山愛吉さん。その50年目の命日の9月23日から「手紙—託された心 久保山愛吉さんと家族に寄せられた手紙」展を開催した。また、並行して久保山忌句会の方がたによる「記念俳句展」が催され、60句が展示された。

平和協会には、入院当時の久保山さん、そして亡くなってから家族に寄せられた手紙の3000通が所蔵されている。そこから100通を選び出した。

手紙は、1973年に久保山すずさんから協会に寄贈されたものであるが、今回の展示に向けて3年がかりでボランティアメンバーがすべてを読み、カードに記録して整理作業をおこなった。都道府県別に分類し、お見舞い・弔慰文・家族への激励に大要分けられた。年

年齢構成は、小学生から700通、中・高校生から800通、大人から1500通であった。そこには、琉球（米施政権下）や前年に返還された奄美から各1通、事件の影響が少ないと思われる北海道から意外と多かった。結核療養所患者、各地の患者同盟、巣鴨拘置所（スガモブリズン）の戦犯、引揚者など、苦しい境涯を綴りながら励ましを送っている。一様に貧しく、肩を寄せ合い生きるという、終戦から9年目の庶民の暮らし振りや戦争で身内を亡くしたことで、再軍備への危惧など時代の雰囲気伝わってくる。手紙の多くには、理不尽な水爆実験に対する憤り、原水爆をなくし平和を作る、との誓いがにじんでいる。

小中学生の手紙からは、教室で教師と生徒が、久保山さんたち乗組員の容態について話し合い、心配し手紙を書いた姿が浮かんでくる。生徒達にとり「久保山のおじさん」はあたかも親戚か知り合いであるかのようである。

小中学生の手紙の一部を紹介したい。

—久保山のおじさん、おからだ少しよくなったそうですね。私はラジオがにくくてたまりませんでした。きょう初めてラジオが少しからだ良くなりましたといいましたので、私はとんでよろこびました。どうぞがんばってください。死なないでください。（ひろこ 小学生）

—おとうさんがたいへん悪くなったとききました。私たちは楽しい2学期をむかえましたのに、あなたはおとうさんのことでむねがいっぱいでしょうね。子どもなのでよくわかりませんが、世界平和にするには原爆水爆など作ることをもうやめにするのがよいのではないのでしょうか。日本の子どもたちは世界へ日本のひげきをくりかえさせないようによびかけがあります。（君恵 小学生）

—みやこさんのお父さんは40だったんだね。僕のお父さんも40です。なくなられたお父さんのためにりっぱな人になってくださいね。僕のちょきんばこをあけてみると73円あり、おかあさんにたしてもらい100円いれておきます。おはなとおせんこうをかってお父さんにあげてください。（茂男 小学生）

—私は中学3年生です。私たちは水爆禁止の第一歩を踏み出したと思います。久保山さんのような人がもう出ないよう、たとえどんなに意見の相違があっても、努力するようすべての国が、すべての人が手をつないでいくべきではないでしょうか。全国民がひとつのかたまりとなって、恐ろしい原水爆の禁止をさげぼう。みやこちゃん、気を落とさないでこの悲しみを二度と

繰り返さないようにしましょう。みやこちゃん、強く正しく生きてください。

感想ノートには次のように記されていた。

「子どもからの手紙を読みました。学校で書かせたところもあるそうで、私も教師としてやらなくてはならないことがたくさんあるとおもいました」（20代女性）。

「たくさん手紙を見て、この時期全国の人が第五福竜丸の被災に強い関心をもっていただことに今さらながら驚きました。子どもたちからの手紙は心がこもっており、学校の先生方のご努力もなみなみならぬものであったと感じられました」（60代女性）。

「全国の方がたが久保山さんの病状に一喜一憂していたことがわかり、当時の日本人はやさしい気持ちの人が多かったと思います。私は小学2年でしたが手紙をださなかったことを残念に思います」（50代女性）。

「日本中からはげましの手紙がきたことに大変感動しました。私より5歳以上も年下の小学1年生の子でもとても心配していました。日本中のすべての人が悲しんだらろうなと思った」（10代女性）。

#### ビキニ水爆50年から地球被曝60年へ

11月20日から2005年1月23日まで、50周年企画の最後の特別展がおこなわれた。豊崎博光写真展「ビキニ水爆50年・地球被曝60年」は、豊崎さんが1978年以来、世界各地を取材してきた64点の「核が作りだした光景」が展示された。その構成は、世界最初の核爆発地点「トリニティ・サイト」そして「エノラゲイ」を導入に「マーシャル諸島の核被害」「ネバダ核実験場と風下の人々」「大地を破壊するウラン採掘」「旧ソ連の核実験被害」「スリーマイル島とチェルノブイリ」「知られざる核実験とその被害」であった。

オープニング・トークで豊崎さんは、「核被害を主題に決めて以来、焦りと苛立ちがありました。ひとつは放射能・放射線という見えないものをどう撮るかということ……放射能と放射線の被害＝ヒバクも見えないし見えずらいということ。被害にあった人たちの写真を撮っても人物写真にしかならない。核汚染地域で人々に聞いていくと、健康被害だけではないものがあるということがわかりました。さらに精神的被害がある。さまざまな核被害史を調べていくと、そこに居住できなくなる、暮らしを変えさせられる。食生活を含め文化や伝統が成り立たなくなるといこともわかってくる」。

「いまビジュアル時代で『見えるもの』『見える写

真』が当たり前のようになっています。しかし見える写真は見えるものしか伝えていない。しかし写真には見えないものも含まれています。そういう情報を読み取ってほしい」と印象深く述べた。<sup>(9)</sup>

### 展示館から外へ、巡回展のとりのくみ

50周年のこの機会に、展示館にたくさんの方がたに足を運んでいただきたい……特別展のたびに新聞などに報じられたこともあり、2004年度の入館者は昨年より約2割増えた。しかし、全国から足を運ぶには、江東区の夢の島公園は遠いともいえる。広島や長崎をはじめ平和のための博物館や郷土資料館、また自治体の平和推進事業などの一環としての「第五福竜丸展」を開きたい。との構想から、リニューアルした展示の移動用パネルを製作し巡回展示を企画した。

2003年秋には立命館大学国際平和ミュージアムの安斎育郎館長のお力添えで、日本平和博物館会議（於広島平和記念資料館）にオブザーバー参加し、50周年事業の概略と巡回展企画について報告させていただいた。

展示用のパネルは、焼津市歴史民俗資料館、日本新聞博物館、立命館大学国際平和ミュージアム、久保山愛吉さんと縁の深い日本船舶通信士労働組合の協力で作製することができた。

この巡回展示は、ビキニ事件・第五福竜丸の被災を中心に展示パネル70点とマーシャル諸島の被害者についての写真・解説パネル50点の合計120点と第五福竜丸に関する現物資料60点により構成した。また、パネル60点からなるコンパクト版の展示セットも作製した。

最初の巡回展示は、8月6日から15日、「高知市平和の日」記念行事の企画展「ビキニ水爆50年—第五福竜丸の核被害を知ろう」として実現した。同市の自由民権記念館を会場に、高知市、同教育委員会、「高知市平和の日」記念事業実行委員会が主催した。

つづいて、10月28日より11月23日まで立命館大学国際平和ミュージアムにおいて「ビキニ水爆被災50年展—放射能と人類—」として開催された（写真5）。この展示では、核を扱ったミュージアムグッズをアーティストの視点から作品化する成安造形大学の津田睦美さんの展示コーナーも設けられた。夏の現代アート展に出品された中ハシクシゲさんと同じ大学であり、それがきっかけとなって12月初めに成安造形大学でのビキニ50年のアート展と記念講演の夕べがおこなわれることにもなった。

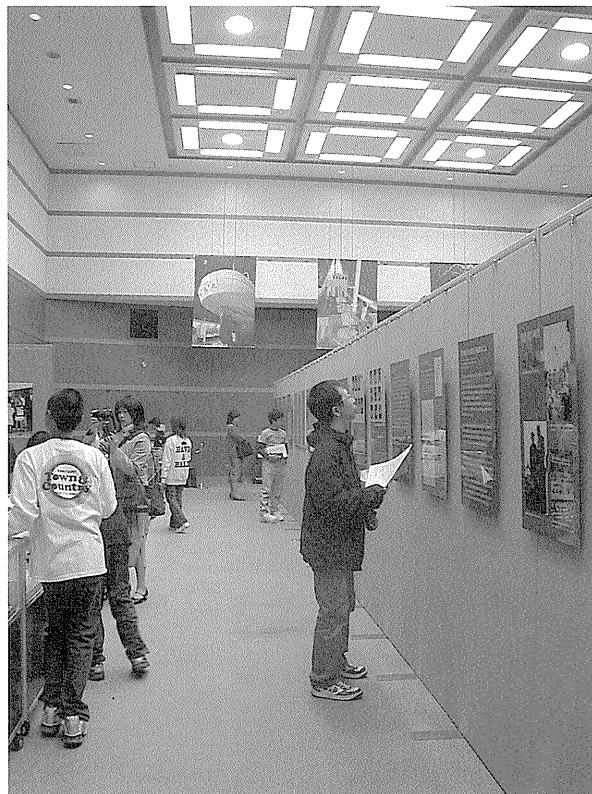


写真 5

コンパクト版による展示会は、西宮市（市平和記念事業）、伊丹市（市平和を考える市民フォーラム）、岸和田市（市平和記念事業）、丸亀市（市平和事業）、焼津市（平和のための戦争展、市は独自に第五福竜丸展、<sup>(10)</sup>鹿児島市（平和のための戦争展）、吉田町（市50周年記念事業・元乗組員大石又七氏講演会など）などで開催された。また高知市、国際平和ミュージアム、西宮市では、記念講演が合わせて催されるなど、「展示館から外へ」ビキニ事件を伝えるとりのくみが前進した。

「第五福竜丸展」は、被爆60年の今年、広島平和記念資料館（2月中旬～6月下旬）と長崎原爆資料館（9月下旬より11月・予定）での開催につながった。

### 50周年にたくさんの種をまく

50周年はたくさんの出会いを得ることでもあった。イラストレーターの黒田征太郎さんは、第五福竜丸のイラストによる50周年のポスターを描いてくださった。さらに黒田さんが10年余描き続けてきたキノコ雲「ピカドン」の作品展をおこなうための検討も、ご本人を交えて始まっている。

新藤兼人監督は、3・1ビキニ記念の集い（04年2月28日）での映画「第五福竜丸」上映に先立ち講演され、「全くカネのないなかで撮影をすすめて、しかしどうしても作っておきたかった」と、製作時のエピソードを披露した。さらに「広島原爆の炸裂の映画を作り

たい」と91歳とは思えぬ気迫で聴衆を魅了し、「第五福竜丸は生きている」との色紙を書いてくださった。

当時、焼津に帰港した福竜丸の放射能測定のために大阪から駆けつけた西脇安博士（大阪市大医学部）は、50周年を前にウィーンから帰国し、2月26日に来館された。ウィーン大学医学部で長く被爆問題について教鞭をとられ、IAEAの委員を歴任された博士は、当時のさまざまなエピソードを語られた。

一方、お会いすることがかなわなかった方々もいた。第五福竜丸23人の主治医を勤められた当時東大病院の三好和夫医師、そして国立東京第一病院の熊取敏之医師が、昨年11、12月にあいついで亡くなられた。アメリカの核科学者でドキュメンタリー「福竜丸（ラッキードラゴン）」の著者、放射能の怖さを告発しつづけてきたラルフ・ラップ博士も9月に亡くなられた。

＊

50周年のプロジェクトをつうじて、繰り返し感慨にとらわれたのは、第五福竜丸の存在の重みであった。船体の実物が保存されているからこそ、人びとは船を思い出し、若い世代は新しく船を知り伝えていこうとする。船を見上げる人びととともに福竜丸の航路を拓いてゆくという大きなテーマに思いを馳せながら、当面するいくつかの課題を記しておきたい。

1) 50周年プロジェクトは、福竜丸の存在とその多彩な結びつきの可能性を示してくれた。福竜丸と展示館を活かした新たなとりくみをつくりだしていきたい。

同時に、毎日ガイドをし展示を見守るボランティアメンバーが、この間のとりくみをつうじて膨らませたアイデアを展示館の日常活動やイベントにも反映させていきたいと思う。

2) 2006年は、展示館がオープンして30周年に当たる。それにむけて、船の保存に力を尽くした市民の記録、原水爆禁止運動の関わり、館建設への経緯などの資料、そして30年間の展示館の歩みなどを整理し、出版・展示をおこなう。

3) ビキニ事件をめぐる未解明の課題は多い。被害は現在進行形である。50周年は、こうした課題への問題意識を改めて鮮明にさせたいと思う。研究者や市民レベルのとりくみとつながり、情報交換や協同をすすめていきたい。戦後・被爆60年のさまざまな分野の動きも注視する必要があると思われる。

ある新聞記者が質問してきた。“50年が終わったら風化がすすむでしょうか”と。50年のとりくみとは、たくさん種をまくことでもあったと思う。それが芽

吹いて広がることを願うが、その芽を育むために何ができるのか、どのように切り結ぶのかも問われているのではない。

原水爆の禁止と平和をねがう市民と運動によって守られた船、保存が実現してから30年の節目にむけて、さらに「原水爆のない未来へ」のメッセージを発信しながら第五福竜丸は航海をつづけるであろう。

#### 《注》

- 1 第五福竜丸平和協会（以下、「平和協会」）の「50周年記念プロジェクトのよびかけ」第五福竜丸だより2003年8月特別号
- 2 平和協会では50周年事業の報告集を作製中。報道リスト、新聞切抜き、関係出版物リストなども収録。ビキニ水爆被災50周年研究集会在04年2月21日、東京・日本青年館で開催、平和協会も協賛した。報告のため来日したマーシャル諸島短期大学核研究所のメアリー・シルク所長は、展示館を訪れて熱心に見学した。
- 3 第五福竜丸の歴史、被災とその後の経緯などは拙著『水爆ブラボー—3月1日・第五福竜丸』（豊崎博光氏と共著、草の根出版会2004）。『もうひとつのビキニ事件』高知県ビキニ水爆実験被災調査団編（平和文化2004）参照。
- 4 前掲『水爆ブラボー』豊崎氏執筆のマーシャル諸島の核被害の項。『ヒバクの島マーシャルの証言』安斎育郎・竹峰誠一郎著（かもがわ出版2004）参照。
- 5 「ラッセル・アインシュタイン宣言」1955年7月9日発表、湯川秀樹博士らノーベル賞受賞者など11人が署名。1957年にはこの宣言を受け「科学と国際問題に関する会議」＝パグウッシュ会議がカナダで開かれた。
- 6 第五福竜丸の被災をめぐる日米間のやりとりは1991年公開の「外交文書」参照。
- 7 岡本太郎の壁画「明日の神話」（幅30m、高さ6m）はメキシコの建設資材倉庫にある。日本で展示しようというプロジェクトが始まっている。
- 8 本展示の写真パンフレットA4判カラー、20頁、価1000円が発行されている。
- 9 豊崎氏のマーシャル研究の集大成『マーシャル諸島核の世紀・1914—2004』全2巻、5月刊行予定（日本図書センター）。
- 10 焼津市は被災50年特別展「第五福竜丸—平和の願い」を焼津市歴史民俗資料館で開催し、当館も所蔵資料を提供した。また20回目となる「第五福竜丸事件6・30市民集会」も開かれた。

（筆者 財団法人第五福竜丸平和協会事務局長・展示館学芸員）